midorinodam.jp

NPO法人
緑のダム北相模

March 2012 No.324-325

３月号の１枚：初参加大学生との交流

［巻頭言］　国・林政の怪

最短0.4年、最長3.3年

　6～12歳までは海辺に住み、13～19歳までは山の中に住んだ。そんなことだから自然の優しさ厳しさを体で感じて育った。大学在学中に起業して43年間は、倒産を含む事業の波にもまれ続けた。最後の事業は空気清浄装置で、ふとしたことから地球の空気清浄装置・森林が壊れかかっていると気付いて、森林の保全・再生に取り組む森林NPOを立ち上げた。

　1998年に森林現場を始めて今年で15年目の活動に入る。昨年4月から「戦後林政史」を大学研究室に通って学んで気付いた事がある。即ち、農林水産業は、二次産業・三次産業とは、産業として根っこのところが全く異なると言う事である。即ち、一次産業は、自然が相手である。

　戦後は特に、今でも何もかも激動の変化である。やむを得ぬところもあるが、林政は時代の変化に連動して猫の目のようにくるくる変わっている。林政史を学んでいて悠久の自然に対峙する一次産業政策として猫の目林政は、根本的な誤りだと思う。産業は、時代の変化・技術発展との競争だと言うものの一次産業は、50年・100年、それ以上のスパンで考え一般方向を誤らないようにしなければならないのではないか。時代の波に翻弄されていては誤った方向に向かう。

　現在のわが国の森林は荒廃の一方に向かい、対策が打ち出せないでいる。一例だが、林野庁の長官は、今年で37代目を迎えている。任期最短0.4年、最長3.3年。何と一人平均の任期は平均1.6年である。37人の長官の内、森林に無関係な職歴者が12人。これで、自然を見据え・洞察力を備えた林政ビジョンを展開できるだろうか。表題を「国・林政の怪」としたが、怪でも何でもない。林政は正常と思えない。

　言うは易しい。当会は、民・産・官・学、全ての人々に呼びかけて森林の長期視野に立つ一般方向・森林ビジョンを求めて、実践・検証・具現化を考えている。

石村　黄仁（本会、代表理事）

今月の定例活動

2012.03

3月 4日（第一日曜日）：
小原本陣の森/森林整備、担い手育成、技術向上。
　　持続的森林経営：弁当持参。参加費：４００円
3月18日（第三日曜日）：
若柳・嵐山の森/里山交流、多様な森林活動。
　　主食・自分のお椀・箸・飲料水は持参。参加費：４００円

FSC
www.fsc.org
FSC® C006376
責任ある森林管理のマーク

[定例活動]小原本陣の森

2月5日（第一日曜日）

今回の定例活動内容は、径路作りの続き、製材を予定していましたが、ここ最近降り続いた雪の所為か、ケヤキの巨木が拠点に辿り着くまでの道を塞いでしまっていたため急遽、径路作りは中止になり、倒木処理を行うことになりました。

巨木の撤去作業については、まず細かい枝を切り、それを小川に平行にして道の端に置いていきました。それらを置く場所も、後々運ぶであろう巨木を玉切りにしたもののことも考慮しつつ・・・の作業で、ちょっとした頭脳戦でした。作業場は雪がまだ残っていて足場は悪く、滑ってしまう人もちらほらいましたが、幸い怪我無く作業を続けることが出来ました。製材作業では、木屑まみれになりながら3年生1人と1年生3人が一生懸命になって板におろしていました。

作業をしていたとはいえ、先ほど触れたように山中は未だ雪が残っており寒かったので、火をたいて暖を取っていました。主に暖を占領していたのは学生(＝ほぼ1年生)だったというのはここだけの話・・・。

今回の活動は思わぬアクシデントとして倒木処理が加わり、こんなことが起こるのだなぁと驚きましたが、ある意味、良い経験になったのではないかなと思います。あれほど直に道を塞ぐほどの倒木には滅多に遭遇しないと思いますので。足場の悪さに加えて、ケヤキ(＝広葉樹)だったということで大負担な作業でしたが、それもまたよき思い出になると願いつつ今回の活動の振り返りとしたいと思います。今回は冬の森の一面を見た定例活動でした。定例活動、お疲れ様でした。

金井　美穂（Forest Nova）

[定例活動]若柳嵐山の森

1月15日（第三日曜日）

「巣立ちの森、若き森林リーダーたち」

無風・快晴。極寒の二月の森は、雪世界。時折、快晴の陽光を受けて杉林に、樹間を雪粉がキラキラ・舞い落ちる。

粉雪降る陽ざしは、来る春を告げている。

参加者：桂北小1名、高井戸中9名、学生連合ForestNova11名、東大林学大学院生6名、生命の森宣言東京6名、一般参加13名、報道取材2名。計46名。

東京大学大学院林政学研究室：体格の良い男性院生5名＋紅一点の梅田学生は、地下足袋装備の本格派、チェンソーの名人とか！？。緑のダム体験・斉藤学校長の森の真実を語る森林巡回観察。午後は、さわやか高井戸中学校生徒と合流して間伐・枝落とし、４m玉切り杉大木の搬出の重労働。高井戸中学生と東大院生の素晴らしいふれあい。

大学連合ForestNova：午前中、ForestNovaの森・間伐作業。午後は、木工小屋での千葉大、女子美大・日大生が混じって簡易製材機実習。

別班、森の中での倒木研修。麻布大女子１年生等の指導には、松尾師匠が安全第一、付ききりで指導。

左上：倒れていた巨木
左下：製材の様子
右上：嵐山での体験学校
右下：１年生ばかり？

生命の森宣言東京：偶にあるハプニングだが25m高・間伐大木が枝かかり。ロープを使って掛け声高く「セイノォ―、ヨイサァッ！」、ズドーンと的確位置に落とした。サスガ！。

放射線測定班：川田会員チームで編成したこの班は、岡田・石原・薄井・ForestNova女子学生による調査班。１ｍ・50ｃｍ・５ｃｍと測定高を3カ所にして夫々、36秒測定。正確な位置での測定には神経を使う。当日の調査では、当地には放射能の影響なしの結果であったが、再度調査予定とか。

一介の森林ＮＰＯが放射線測定に取り組む意味を見過ごすことは出来ない。

終礼後、東京大大学院生と学生連合ForestNovaが、夕闇の迫る集会広場で万全を期して、寒さを防ぐ“石油缶・たき火を豪華“に楽しみながら、バトル！？、ならぬ熱い意見・情報交換！。寒さを感じないようにと石村婦人が焚火で焼いた黄粉餅を配っていた。美味しかったか～い！。

今年卒業のForestNova4年生は全員が森に関わる素晴らしい会社に就職が決定した。彼ら、森と調和しながら自から成長していく。森林現場体験で自ら培った力量を蓄えてこの森から巣立って行く。

社会人になって、夏・冬の休暇日には、先輩・後輩、こぞって、この森に集まって「森を再生する知恵・情報を交換し、森林を守る活動継続」を約束していた。

伊藤小夜子（本会、会員）

[報告１]
湘南の森活動報告

１月１３日、今年初めての作業。臼井・佐藤の２名は、花水川の河原に直行、 お目当ては手ごろな笹竹、首尾よく長さ90センチに揃えたものを50本ほどゲットし、 森に戻りました。 この笹竹は２月末に予定しているテスト植林の予定ポイントに目印として挿すものです。 昨年来、この森では自然枯死したり台風にやられて伐採された高木が数多くあり、 これらの代替えとして苗を植えて森の世代交代を図ろうという取り組みなのです。 伐採された木の８割がたは、ソメイヨシノであったことから、 植林する樹種を自然種であるヤマザクラと定めました。

浅間山頂上付近、浅間山北斜面、中央広場、ヤブラン平の４箇所に 計２３ポイントを選定しました。周囲の高木の状況を勘案しながら、 より光の入る場所を探すように努めましたが、上ばかり見ていて首が凝ってしまいました。 他の仲間は恒例の下草（笹）刈りに精を出しました。 ヤブラン平には寒桜が一輪花をつけており、春の予感を少しだけ与えてくれました。

28日は、日差しはあるものの丹沢おろしが吹きつける、 これまでで一番寒いと思われる日となりました。 先ず、浅間山頂上付近の枯死間近と思われるミズキの大木を伐採、 ロープをかけて安全な方向に倒すことに成功しました。 この後が大変、枝を切り、幹を玉切りして、 景観上問題ないところまで運んで廃棄、皆で大いに汗をかきました。 次に中央広場の旧展望台付近のサクラの枯死木を３本とヤマグワを １本伐採整理しました。

佐藤　憲隆（湘南の森）

[報告２]
フォレストキッズスクール報告

1月22日

第１回フォレストキッズ・スクール「きこりになろう！」が若柳嵐山で開催された。これは本会の後援を受け、全国森林インストラクター神奈川会（ＪＦＩＫ）が主催した子ども対象の森林体験イベント。森を初めとした自然、その大切さ、かけがえのなさを子ども達に肌で感じてもらうことが目的である。前日の悪天で開催が危ぶまれたが、何とか１７名の参加者を得ることができ、ひと安心。

午前中は「子ども樹木博士」。１０種ほどの樹木を見分ける認定試験だ。試験といっても学校のそれとは違い、いたって気楽なもの。赤点などはありません。降り積もった雪を踏みしめながら森の中を歩く子ども

たちとお父さん、お母さん。「これはどの葉？　何の木？」。一緒に図鑑と首っ引きの仲良い姿は微笑ましく、石村代表は感動しきり。先月のニュースレターにさっそく記事を投稿して下さった。

お昼に待っていたのはあったかいキノコ汁。中実はシイタケ、マイタケ、ヒラタケ、エノキタケ、さらにネギと油揚げ。湯気の上がったキノコ汁にはお代わりする人が続出で皆笑顔。身も心も温まる。

本日のメインイベントである間伐体験はその後。川田会員がリーダーだ。直径２０ｃｍほどのスギの木を伐る。が、径のわりには背が高く、掛かり木にならないよう倒す方向を慎重に見定める。受け口、追い口を代わる代わる伐ってから皆でロープを引く。ドスーンという大音響。そして歓声と拍手。普段の生活では決して味わうことのない体験だ。「木をひっぱるとバサバサとなり、楽しかったです。初めて切ったので
ちょっとドキドキしました」「これからも森林体験、積極的に行って森と仲良くなりたい」「耳をすますと鳥の声が聞こえたり、風の音が聞こえたりして、自然はいいなと思いました」。アンケートにはこんな感想が寄せられた。
寒かったけれど身体ごと森にひたった一日。おやつに提供されたＪＦＩＫスタッフ手づくりの焼き芋も参加者の心を温めてくれたようだった。

内野　郁夫（本会、理事）

[報告３]
間伐体験と嵐山散策イベント活動報告

2月18日

私たちが日々活動を続けて行く中で、たくさんの方との出会いがあります

緑のダムの方はもちろん、林業家の方や、小原の方、学生・・・。その中でも日頃からお世話になっている小原の方たちに、嵐山に入ってもらい、一緒に活動を体験してもらおうと思い、間伐と散策のイベントを実施しました。

この日は前夜に雪が降ったせいで、まだまだ厚く雪が積もっており、しびれるような寒さでした。しかし、そんな悪条件の中でも、普段課外授業に協力させて頂いている桂北小学校から、４年生が２人参加してくれました。

初めに、拠点に集合しあいさつをした後、普段活動をしているＢ地点まで移動し、間伐を行いました。
実際に間伐をおこなう前に、以前課外授業で学んだ、『人工林の成り立ち』、『間伐の必要性』を子供たちの口から聞くことができ、子ども達も、本当に森に興味を持ってくれているのだな、と実感しました。

そして、ロープ掛け、受け口、追い口を作り、伐っていくという作業に入っていきます。これは大人でも大変な作業ですが、子どもと学生が一緒になって声を張り上げ、力いっぱい、元気よく行うことが出来ました。一緒に行動することで、多少の苦しさも楽しさに変わっていいきました。

その後、望星の森、寺跡を通り、拠点に戻っていくのですが、その道々で森の持つ魅力、そしてその成り立ち等をお話ししました。子どもたちからは森にもっと入りたい、そして、森をもっとよくしたいという言葉を聞くことができました。

また、子どもたちから地域の現状を聞くことができ、こちらが勉強させてもらうことも多々ありました。

その後、童心に帰り雪遊びをしながら、拠点まで帰って行きました。

拠点に着くころには、すっかり身体が冷え切っていたので、火を囲み、今日行ったことの振り返り等をしつつ、トマト味の洋風の鍋をみんなで食べ、身も心も温まりました。

その後も、楽しい会話は途切れず、お別れするのが寂しくなる程でした。

地元に住む方と森に入り、一緒に活動をしていく中で、森が持つ魅力に触れ、森を更に好きになっていく。Forest Nova☆は、そんな活動をこれからも続けて行きたいと思いました。

淺野　雅樹（Forest Nova）

[報告４]
嵐山定例活動に参加して

2月19日

今回、初めて緑のダム北相模の活動に参加させていただいた。活動内容としては、午前中、斎藤氏と石村氏に山の中を案内していただき、午後からは、手ノコを使って、木の伐採を行った。以下、参加するにあたっての目的と参加して得たことの2点を報告する。

私たちは、現在、[1]NPO等、森林ボランティア活動に取組む共的な主体が、どのようなステークホルダーとの関係性の中で活動を行っている、あるいは行ってきたのか、[2]参加者の属性は、都市近郊の森林ボランティアと地方のそれとではどのように異なっているのか等の切り口から森林ボランティアに関する調査を行っている。そこで、今回活動に参加するにあたって、主に[2]に関連する、どのような方々が、どのような姿勢で活動されているのかを学び、感じとることを目的とした。参加してみて、まず感じたのは、参加者の方々の年齢層が幅広いことである。小学生から高齢者の方が参加されていて、多様性のある団体と感じた。参加者の方の活動に対する姿勢は、1回の参加で把握できるものではないが、斎藤氏のお話から、山の現状への問題意識となんとかしたいという強い意志が感じ取れた。印象的だったのは「山を林業という一つの側面からみるのではなく、多角的に捉えたい」とおっしゃっていたことである。多角的な山の価値がもっと社会に評価されるためには、緑のダム北相模のような従来のNPOの枠をこえた新たな取組みが必要であると感じた。

梅田　華衣（東京大学大学院）

[報告５]
杉並区教員研修報告

1月25日

杉並区の教員研修を行った。テーマは「雑木林の成り立ちと自然保護」。高井戸中学教員・宮村会員から依頼され気軽に引き受けてはみたものの、対象は学校の先生方（しかも理科）である。私も私学の高校で教員を務めているので生徒相手の授業は馴れているが、先生は初めてなのでどうなることやら。

室内講義の前に、まず高井戸中に隣接した三井公園で野外実習。宮村会員が準備して下さった資料を片手にさっそく樹木の同定だ。ここはかつて三井財閥の所有地であったそうだが、今は区の管理下にあり人々の憩いの場になっているとのこと。さほど広くはない公園にはコナラやケヤキ、ミズキ、イヌシデといった落葉樹の巨木が多い。加えてシラカシなどの常緑樹もあり、雑木林と自然植生の

要素が入り混じった面白い林相を見せている。こんな森が学校のそばにあるなんて羨ましい限り。先生方は楽しそうに実習に取り組んでいる。

後半の座学は高井戸中に戻ってから。テーマ通り雑木林の成り立ちと仕組み、放置するとどうなるか（植生遷移）、自然保護の様々な考え方を前半の野外実習を踏まえて話をさせて戴いた。生徒と違って寝る人はいないが、反応はどうか？　よくわからない。

正味１時間半。人前で話しをすることに馴れ切っていた私には久々に緊張感を持てたひとときであった。残念ながら「森林」が学校の理科教育に占める割合は少ない。しかし、地球温暖化、生物多様性等、今日ほど環境問題が声高に叫ばれている時代はないだろう。森林の重要性、かけがえのなさについてもっとゆっくり話しあえる機会を持つことができれば何よりと思う。

内野　郁夫（本会、理事）

[事務局からの お知らせ、お願い]

イベント告知：国産材の積み木で東京駅舎をつくろう

３月２８日から４月１日にかけて東京駅八重洲口キッチンストリート内イベントスペースで積み木の東京駅舎をつくるイベントを企画しています。本会が間伐、搬出し、製作した積み木を使用し、制作の指導はカンボジア、アンコール遺跡にて修復・考古調査活動を行う上智大学アジア人材養成研究センターが行います。実際の制作は、杉並区立高井戸中学校地球環境部の生徒が中心となって行います。東京駅グランスタを運営する株式会社鉄道会館の協力のもと八重洲口キッチンストリートで参加者とともに東京駅舎を制作するイベントになります。

森林保護から生まれた積み木で、歴史的な文化遺産を作ることにより、地球規模での問題を考えるきっかけとします。参加自由ですので、ぜひご参加ください。詳細は同封のチラシをご覧ください。

東京駅
キッチンストリート

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食；自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

NPO法人
緑のダム北相模

急がず、無理せず、楽しく、休まず、
ボチボチと・・。
そして、沢山の参加で森は、良くなる。
（台風の日は勉強会開催。１３年間、
一日も休まず“継続は力”。）

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
事務局：154-0023　東京都世田谷区若林３－３５－９
発行人：NPO緑のダム北相模　事務局　03－3411－1636
ＵＲＬ：http//www.midorinodam.jp
E-mail： info●midorinodam.jp　●を＠に変更して使用してください
協働団体：セブンイレブンみどりの基金、相模原市（市民協働推進課）、
東海大学付属望星高等学校、生命の森宣言・東京
支援団体：WWF JAPAN、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、
神奈川県建具協同組合、JFEメカニカル、東急コミュニティ、
マルモ出版